

簡易版学校教員の職務多忙感・負担感尺度と Time Perspective-Sense Of Coherence 9 の作成

Creation of the School Teacher's Busyness and Burden and the Time Perspective-Sense Of Coherence 9

今井田 貴裕¹ IMAIDA Takahiro ・ 磯和 壮太郎 ISOWA Soutarou

(¹ 人間環境大学心理学部専任講師)

Keyword: School Teachers, Busyness and Burden, Time Perspective-Sense Of Coherence 9

目的

学校教員の職務に対する多忙感とは、心身の健康を増悪させる要因の一つである。多忙感とは、多岐に渡る職務によって増悪すること¹⁾や、バーンアウト症状や離職の原因となること²⁾などがわかっており、尺度開発が行われているが、概念が定まっているとは言い難い。例えば、神林³⁾は、多忙感に負担感の要素を追加し、「仕事に追われて生活のゆとりがない」や「授業の準備をする時間が足りない」、「生徒指導が必要な児童生徒が増えた」、「保護者や地域住民への対応が増えた」、「教員が行うべき仕事が多すぎる」、「教員の給料は安い」の6項目により捉える試みを行った。他方、小林⁴⁾は、多忙感を「学校で忙しすぎるので、やり残した仕事を家に持ち帰らなければならないとき」の1項目で、負担感を「いろいろな仕事を任されるとき」の1項目で捉える試みを行った。このように、近年では、学校教員の職務に対する多忙感や負担感の定義が不明瞭であるためか、多忙感と負担感が混同した尺度が多い。

こうした背景から、著者らは多忙感と負担感の核となる概念について、先行研究に基づいた定義を行った。まず、学校教員の職務に対する多忙感とは、職務を忙しいと感じているため、職務量の多さを反映している概念⁵⁾と考えられる。その一方で、教員の職務に対する負担感とは、明確に定義した研究を筆者らが確認しても見当たらなかった。一般的に、負担が義務や責任を抱えたり、力量を超えた仕事であったりするという意味を考慮し、負担感が自分自身の力量を超えた職務を抱えている感覚と仮定した。そこで、本研究では、学校教員の職務に対する多忙感とは職務に対する量的側面を、負担感とは職務に対する質的側面をそれぞれ反映していると操作的に定義した。

しかし、多忙感と負担感はもともと区別しにくい性質を持つ概念と考えられる。例えば、神林³⁾の考案した多忙感・負担感の項目である「仕事に追われて生活のゆとりがない」は、仕事の量の多さから感じている多忙感と生活にゆとりを持たない負担感を混同した項目である。小林⁴⁾の考案した両項目も、多忙感と負担感をいずれも包含する項目であろう。以上から、多忙感と負担感を区別して測定するには、多忙感と負担感の項目を明確に区別したうえで、等価かつ同数生成する工夫が必要であろう。

項目を概念別に等価かつ同数生成する手法として、マッピングセンテンスと呼ばれる項目の生成方法が挙げられる。本法を用いたSense Of Coherence-29 (SOC-29) は、SOC 概念と異なる時間的概念（過去・現在・未来）などの4つのファセットを設定し、下位概念（把握可能感・処理可能感・有意味感）別の項目を合計で243項目を生成している。SOC-29はその後、243項目に対する項目分析を繰り返して、最終的に把握可能感11項目、処理可能感10項目、有意味感8項目の計29項目となった⁶⁾。本研究では、多忙感と負担感の項目を等価かつ同数に設定する必要があるため、項目の生成にマッピングセンテンスが適しているであろう。そのため、本研究では、坂本他⁷⁾を参考とした職務領域（生徒や児童、保護者への対応や授業準備や校務分掌）のファセットと、職務に対する感じ方（多忙感・負担感）のファセットをそれぞれ設定して項目を生成することとした。なお、長大な項目数の尺度を作成した場合、教育現場での介入の効果測定や縦断調査の際の調査協力者の負担が多大となる。そこで、本研究の第一の目的を多忙感や負担感の核となる概念のみを捉える簡易版尺度を作成することとした。

ところで、SOC-29は、構造化面接で活用できるSOCの測度が必要であったこと⁸⁾から、様々な言語での3項目版が開発されており⁹⁾、日本語版であるUniversity of Tokyo Health Sociology version of the SOC 3 scale (SOC-3UTHS)⁸⁾も開発されている。しかし、同尺度は3下位概念で構成されるSOCを3項目で捉えるため、下位概念毎の信頼性係数を算出できない。さらに同尺度は現在の日常的なSOCを問う項目で構成されているのみであり、SOC-29にあった過去や未来のSOCを問う項目が欠落している。そのため、SOC-3 UTHS⁸⁾に過去や未来のSOCを問う項目を追加する必要がある。そこで、本研究では、SOC-3UTHS⁸⁾を発展させる形で、過去・現在・未来のSOCを回答させる尺度の作成を第二の目的とした。

本研究では、まず学校教員の多忙感と負担感を回答させる尺度および過去・現在・未来においての把握可能感と処理可能感、有意味感を問うSOC尺度を作成した。さらに、これらの尺度の構成概念妥当性を検討するため、ストレッサーやストレス反応との関連を検討した。

方法

調査対象者

Web調査サービスであるサーベロイドに登録しているモニターのうち、スクリーニング調査においてWeb調査サービスに登録しており、業種セグメントを教育業に設定している6429名の協力を得た。さらに、スクリーニング調査から抽出された小学校・中学校・高等学校の学校教員925名に対して本調査を実施した。このうち、質問票内に設定されたダミー項目（例、この項目には7と答えてください）3つ全てを正確に回答し、大規模な欠損値のない平均年齢46.24歳（SD = 11.58）の学校教員632名を対象とした。なお、本研究で

は調査対象者の性別や校種の記載は研究の主旨と外れるため省略したが、スクリーニング調査及び本調査の調査対象者の抽出過程および属性については磯和・今井田^{12) 13)}を参考とされたい。

尺度構成

多忙感と負担感は、ファセットデザイン¹⁰⁾に基づくマッピングセンテンスを用いて坂本他⁷⁾を参考とした職務領域（授業や教材研究・校務分掌や事務作業・児童生徒への対応、保護者への対応）のファセットと職務に対する感じ方（多忙感・負担感）のファセットにより8項目を生成した。同8項目を簡易版学校教員の職務多忙感・負担感尺度とした。回答は、7件法（「1. まったくあてはまらない」、「2. あてはまらない」、「3. あまりあてはまらない」、「4. どちらともいえない」、「5. ややあてはまる」、「6. あてはまる」、「7. 非常にあてはまる」）で求めた。同尺度は高得点になるほど多忙感や負担感を感じていることを示す。

SOCは、SOC3-UTHS⁸⁾に過去と未来のSOCについて問う6項目を追加した合計9項目を用いた。以上を、Time Perspective-Sense Of Coherence 9（TP-SOC9）とした。回答は、5件法（「1. あてはまらない」～「5. あてはまる」）で求めた。同尺度は高得点になるほどSOCが強いことを示す。

ストレッサーとストレス経験については、職業性ストレス簡易調査票¹¹⁾のA領域とB領域をそれぞれ用いた。A領域（「1. そうだ」、「2. まあそうだ」、「3. ややちがう」、「4. ちがう」）17項目とB領域（「1. ほとんどなかった」、「2. ときどきあった」、「3. しばしばあった」、「4. ほとんどいつもあった」）29項目で、回答はいずれも4件法で求めた。同尺度は高得点になるほどストレッサーを多く経験しており、ストレス反応を強く感じていることを示す。

倫理的配慮

回答に際して、中断や放棄の自由を明記するなどの厳格な倫理的配慮をした上で、調査を実施した。調査時に、第二著者の研究倫理審査の承認を受けた（承認文書番号：名自院学第246号）。

なお、本研究の調査方法及び使用するデータセットは磯和・今井田^{12) 13)}と同一であるが、異なる目的で行われた研究である。

統計ツール

分析には、R version 4.2.2を使用した。

欠損値処理

分析に用いたデータセットには113の欠損値が含まれていたため、欠損値処理を行な

った。まず、データの欠損パターンを確認するため、Missing Completely At Random (MCAR) 検定を行った。その結果、欠損パターンはMCARではないという帰無仮説は棄却された ($\chi^2 = 7884.00$, $df = 16020$, $p = 1.00$)。続いて、欠損値の処理を多重代入法により行った。代入方法はPredictive Mean Matching (PMM) を、代入の反復回数は100回を、作成するデータセット数は10をそれぞれ指定した。なお、代入に際し参照するデータからデモグラフィック変数を削除した。 α 係数の算出と確認的因子分析を除き、以降の分析には作成された10のデータセットを統合した結果を記す。また、 α 係数については統計量を統合する方法を有さないため欠損値をペアワイズ削除したデータによって分析することとした。さらに、確認的因子分析については多重代入法を用いて欠損値を処理する前のデータを使用し、完全情報最尤推定法によって分析を行った。

結果

簡易版学校教員の職務多忙感・負担感尺度とTP-SOC 9の各項目の基礎統計量

作成した簡易版学校教員の職務多忙感・負担感尺度とTP-SOC 9の項目の特徴を検討するため、項目別に基礎統計量を算出した。簡易版学校教員の職務多忙感・負担感尺度 (Table 1) においては、天井効果が確認されなかったものの、右寄りのデータであった ($M = .485 \sim 5.57$, $SD = 1.44 \sim 1.59$)。他方、TP-SOC9 (Table 2) においては、床効果と天井効果が確認されなかった ($M = 3.25 \sim 3.58$, $SD = 0.85 \sim 0.95$)。そのため、項目の基礎統計量から削除する必要はないと判断された。

Table 1 簡易版学校教員の職務多忙感・負担感尺度の各項目の基礎統計量

ファセット	項目内容	<i>M</i>	<i>SD</i>
多忙感	1. 授業や教材研究について、多忙を感じている	5.22	1.56
	2. 校務分掌や事務作業について、多忙を感じている	5.57	1.44
	3. 児童生徒への対応について、多忙を感じている	5.28	1.46
	4. 保護者への対応について、多忙を感じている	5.18	1.53
負担感	5. 授業や教材研究について、負担を感じている	4.85	1.59
	6. 校務分掌や事務作業について、負担を感じている	5.39	1.51
	7. 児童生徒への対応について、負担を感じている	4.99	1.58
	8. 保護者への対応について、負担を感じている	5.31	1.52

Table 2 TP-SOC 9の各項目の基礎統計量

ファセット	項目内容	<i>M</i>	<i>SD</i>
把握可能性	過去 1. これまでの私は、日常生じる困難や問題を理解できたり予測したりできた	3.33	0.95
	現在 2. 私は、日常生じる困難や問題を理解したり予測したりできると思う	3.29	0.93
	未来 3. これからの私は、日常生じる困難や問題を理解できたり予測したりできると思う	3.19	0.94
処理可能性	過去 4. これまでの私は、日常生じる困難や問題の解決策を見つけることができた	3.38	0.88
	現在 5. 現在の私は、日常生じる困難や問題の解決策を見つけることができると思う	3.31	0.87
	未来 6. これからの私は、日常生じる困難や問題の解決策を見つけることができると思う	3.25	0.90
有意味感	過去 7. これまでの私は、人生で生じる困難や問題のいくつかは、向き合い、取り組む価値があると思って来た	3.58	0.88
	現在 8. 現在の私は、人生で生じる困難や問題のいくつかは、向き合い、取り組む価値があると思う	3.46	0.85
	未来 9. これからの私は、人生で生じる困難や問題のいくつかは、向き合い、取り組む価値があると思えると思う	3.42	0.87

簡易版学校教員の職務多忙感・負担感尺度の因子構造の検討

まず、簡易版学校教員の職務多忙感・負担感尺度 8 項目の因子構造を確認した。仮定された多忙感と負担感の 2 因子構造で確証的因子分析を行ったところ、モデルの適合度 (χ^2 (19) = 348.05, $p < .001$, GFI = .96, AGFI = .91, CFI = .85, RMSEA = .21, AIC = 15486.57) は許容範囲であったものの、因子間の共分散が 1 を超えたため、不適解である可能性が示された。そこで、多忙感と負担感をまとめた 1 因子構造で再分析したところ、モデルの適合度 (χ^2 (20) = 374.33, $p < .001$, GFI = .96, AGFI = .91, CFI = .84, RMSEA = .22, AIC = 15521.60) が同程度であったが適解であった (Figure 1)。本研究では後者のモデルを採択し、同尺度の多忙感・負担感の尺度得点を分析に用いた。

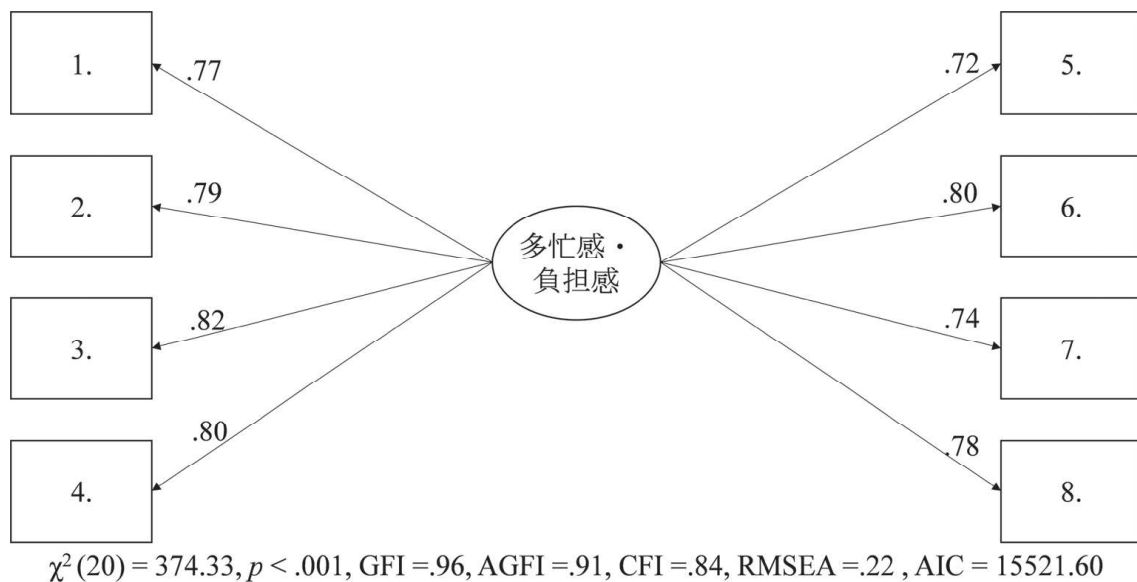
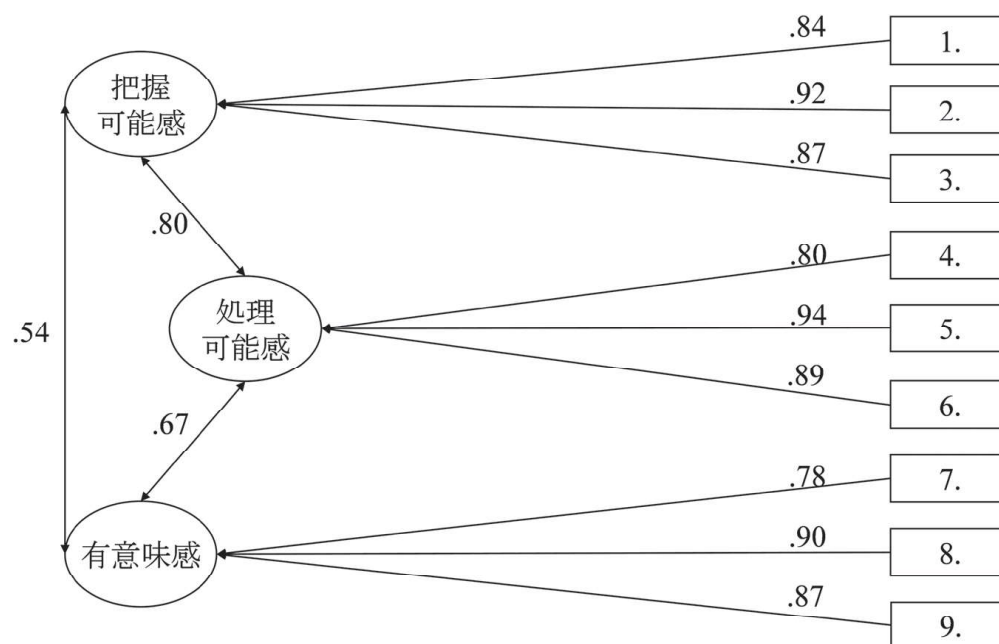


Figure 1 職務に対する多忙感・負担感の確証的因子分析

TP-SOC 9 の因子構造の検討

次に TP-SOC 9 の 9 項目に対して、確証的因子分析によって因子構造を確認した。SOC の下位概念 (把握可能感・処理可能感・有意味感) の 3 因子を仮定したモデルを検討した結果、適合度 (χ^2 (24) = 210.48, $p < .001$, GFI = .98, AGFI = .95, CFI = .94, RMSEA = .14, AIC = 10436.16) が許容範囲であった (Figure 2)。本研究では、従来の SOC 尺度に倣い、尺度得点と把握可能感、処理可能感、有意味感の 3 下位尺度得点を分析に用いた。



$\chi^2(24) = 210.48, p < .001, GFI = .98, AGFI = .95, CFI = .94, RMSEA = .14, AIC = 10436.16$

Figure 2 TP-SOC 9の確証的因子分析

各変数の基礎統計量および相関分析

最後に、作成された尺度の構成概念妥当性を検討するため、簡易版学校教員の職務多忙感・負担感尺度の多忙感と負担感、TP-SOC 9の把握可能感と処理可能感、有意味感、職業性ストレス簡易調査票のストレッサーとストレス反応の基礎統計量及び信頼性係数を算出し、各変数間の相関分析を実施した。結果をTable 3に示した。

	<i>M</i>	<i>SD</i>	α	多忙感・負担感	TP-SOC 9				ストレス簡易調査票	
					SOC	把握可能感	処理可能感	有意味感	ストレッサー	ストレス反応
多忙感・負担感	5.23	1.23	.92	—						
TP-SOC 9	3.36	0.71	.93	.06 ***	—					
把握可能感	3.27	0.86	.90	.07 ***	.88 ***	—				
処理可能感	3.31	0.81	.90	.03 **	.91 ***	.75 ***	—			
有意味感	3.49	0.78	.88	.04 ***	.81 ***	.52 ***	.62 ***	—		
ストレッサー	2.58	0.63	.76	.45 ***	-.11 ***	-.09 ***	-.10 ***	-.11 ***	—	
ストレス反応	2.12	0.36	.95	.38 ***	-.25 ***	-.18 ***	-.22 ***	-.25 ***	.64 ***	—

*** $p < .01$, ** $p < .01$

注) 基礎統計量の値は多重代入法によって欠損値を補填した後に各データセットで算出された値を統合した。また、 α 係数は欠損値をペアワイズ削除して算出した。

まず、尺度の基礎統計量や信頼性係数は概ね良好な結果が得られた。多忙感・負担感 ($M = 5.23, SD = 1.23$) とストレッサー ($M = 2.58, SD = 0.63$) が右寄りのデータを示したが、各尺度の内的整合性は良好であった ($\alpha = .76 \sim .95$)。

次に尺度間の関連について検討するために相関分析を行ったところ、全ての相関係数が0.1%水準で有意であった。多忙感・負担感は、TP-SOC 9とはほとんど相関がなく ($r_s = .03 \sim .07$)、ストレッサー ($r = .45$) やストレス反応 ($r = .38$) とは中程度の正の相関が得られた。他方、TP-SOC 9の因子間には強い正の相関 ($r_s = .52 \sim .75$) が得られた。TP-SOC 9は、ストレッサーとはほぼ無相関 ($r_s = -.09 \sim -.11$) であり、ストレス反応とは弱い負の相関 ($r_s = -.18 \sim -.25$) がそれぞれ得られた。また、ストレッサーとストレス反応の間には強い正の相関 ($r = .64$) が確認された。

考察

本研究の目的は、学校教員の職務に対する多忙感と負担感を区別して測定する簡易版の尺度と、過去・現在・未来を網羅しつつ信頼性係数も検討可能なSOCの尺度を作成することが第一の目的であった。さらに、これらの尺度の構成概念妥当性を検討するため、これらの尺度とストレッサーやストレス反応との関連を検討することが第二の目的であった。簡易版学校教員の職務多忙感・負担感尺度については、多忙感と負担感を区別できなかったものの、他尺度との比較により多忙感・負担感の構成概念妥当性が示された。他方、TP-SOC 9については、把握可能感と処理可能感、有意味感の因子的妥当性が示されたものの従来のSOC尺度とは異なる結果が得られたことから構成概念妥当性が示されなかった。

簡易版学校教員の職務多忙感・負担感尺度

簡易版学校教員の職務多忙感・負担感尺度に対して多忙感と負担感を区別した確証的因子分析を試みたところ、多忙感と負担感の因子間相関が1.00を超えたため不適解である可能性が示された。そのため、本研究では、多忙感と負担感を区別した尺度を作成できなかった。しかし、1因子解とした場合には良好な適合度であった。これは、多忙感と負担感は混同しやすい概念であること³⁾ やマッピングセンテンスでは項目がまとまりすぎる傾向にあること¹⁴⁾ などが原因であろう。

ただし、同尺度は項目の構成を等価にすることにより多忙感と負担感の独自成分を抽出した分析することが可能である。しかし、従来の重回帰分析などで同時に投入した場合には、多忙感と負担感の共通成分が多すぎるため分散拡大係数 (Variance Inflation Factor: VIF) が高じ、多重共線性の問題が生じやすくなると考えられる。そのため、多重共線性の問題が回避できるリッジ回帰分析などを除き、同尺度の多忙感と負担感を区別して用いるべきではないと考えられる。

TP-SOC 9

TP-SOC 9の把握可能感と処理可能感、有意味感を区別した確証的因子分析を試みたところ

ろ、モデルの適合度は許容範囲であり、TP-SOC 9の因子的妥当性が示された。SOCは汎抵抗資源と呼ばれる多様なリソースを動員してストレスに対処する経験を通じて徐々に形成され、一度形成されたSOCは大きく変化しない⁶⁾とされている。しかし、SOC3-UTHS⁸⁾は現在のSOCを問う項目に限定されており、高強度のストレスを経験することによって一時的にSOCが減弱した際には、SOCの評価が過少となるかもしれない。そういった点では、TP-SOC 9の過去・現在・未来のSOCを問うことにより、ストレスの影響を受けやすいSOCの部分とそうでない部分を包括的にとらえることが可能となると考えられる。

なお、TP-SOC 9を過去のSOCと現在のSOC、未来のSOCの3因子構造で確証的因子分析をした場合、因子間相関が1.00を超え、適合度 ($\chi^2(24) = 685.70, p < .001, GFI = .94, AGFI = .87, CFI = .76, RMSEA = .27, AIC = 11275.02$) も低下することから、不適解である可能性が高い。そのため、本尺度もこれまでのSOC尺度に倣って全体の尺度得点と把握可能感、処理可能感、有意味感でとらえることが望ましいであろう。

各尺度の構成概念妥当性の検討

最後に、簡易版学校教員の職務多忙感・負担感尺度とTP-SOC 9の特徴を検討するために基礎統計量を算出し、これらの尺度と職業性ストレス簡易調査票¹¹⁾のストレスとストレス反応の相関分析によって構成概念妥当性を検討した。

まず、尺度の基礎統計量からは、多忙感・負担感やストレスに天井効果が生じてはいないものの、右寄りであったことがわかった。したがって、本研究で用いたデータは、ストレスフルな学校教員が回答したと考えられる。なお、学校教員のストレスフルな傾向は、筆者らが行ってきた異なるデータセットでも同様の傾向¹⁵⁾を示していた。これは、本研究のデータが母集団と不一致であったのではなく、わが国の学校教員自体がストレスフルなことを示しており、学校教員への早急なメンタルヘルス増進の対策が必要であることが示唆された。また、本研究で作成された尺度の内的整合性は、簡易版学校教員の職務多忙感・負担感尺度 ($\alpha = .92$) とTP-SOC 9 ($\alpha = .88 \sim .93$) のいずれも良好であった。特に、TP-SOC 9については、これまでのSOC尺度の下位概念の信頼性係数が.80を超えることが少ない点^{16) 17) 18)}を考慮すると、非常に良好な値が得られたと考えられる。

さらに、尺度の相関分析からは、多忙感・負担感がストレスやストレス反応と正の相関を示したことから、ストレスフルな学校教員ほど多忙感・負担感を強く感じているといった妥当な結果が得られたと考えられる。他方、TP-SOC 9は、多忙感・負担感やストレスとの相関係数は極めて低くほぼ無相関であり、ストレス反応とは弱い負の相関が確認されるのみであった。TP-SOC 9が多忙感・負担感やストレスとの相関係数が極めて低かったにも関わらず有意であったのは、本研究のサンプルサイズの大きさによる検出力の高さが主たる原因であろう。なお、TP-SOC 9とストレスの相関係数 ($r_s = -$

.09 ～ -.11) を効果量として検討した場合、極めて小さい値である。こうした結果は、従来のSOC尺度がストレッサーと強い負の相関関係にある点^{19) 20)}とは異なっていた。これは、本研究の対象者がストレスフルな学校教員に偏っている可能性もあるが、TP-SOC 9が従来のSOC尺度とは異なる部分を測定している可能性もある。しかし、本研究のデータセットからはこれらを解決することはできないため、TP-SOC 9を一般健常群に対して調査し、従来のSOC尺度との関連を比較することによる併存的妥当性の検討が必要である。今後は、TP-SOC 9の特徴を検討していくことにより、従来のSOC尺度との異同を検討する必要がある。

限界と課題

本研究では、TP-SOC 9は多忙感・負担感やストレッサーといった変数とほぼ無相関であった。そのため、本研究のTP-SOC 9が高い内的整合性が得られ因子の妥当性が示されたものの、従来のSOC尺度とは異なる結果が確認された。したがって、今後は、TP-SOC 9と従来のSOC尺度の相関分析などを実施することにより、併存的妥当性を示す必要がある。さらに、本研究の対象者が学校教員であったが、多忙感・負担感やストレッサーは右寄りの値を示しており比較的ストレスフルな特徴を有していた。こうした要因がTP-SOC 9に影響を与えた可能性も排除できないため、今後は一般健常群などを対象とした検討が必要である。

附記

本研究で作成した簡易版学校教員の職務多忙感・負担感尺度を Appendix 1 に、TP-SOC 9 を Appendix 2 にそれぞれ示した。

文献

- 1) 青木 純一・堀内 正志, 教員の多忙化をめぐる経緯と教員勤務実態調査に関する一考察 : 学校における効果的な多忙化対策の基本的論点を探る, 日本女子体育大学紀要, 44, 2014, 17-26.
- 2) 布川 淑, 教師の多忙と多忙感—公立高等学校教師の教育活動に関する聞き取り調査にもとづいて, 立命館産業社会論集, 42, 2006, 87-108.
- 3) 神林 寿幸, 周辺の職務が公立小・中学校教諭の多忙感・負担感に与える影響: 単位時間あたりの労働負荷に着目して, 日本教育経営学会紀要, 57, 2015, 79-93.
- 4) 小林 克樹, 校内研修における教師の協働が研修意欲に与える効果に関する事例研究, 教育実践研究, 23, 2013, 301-306.
- 5) 高木 亮・北神 正行, 教師の多忙と多忙感を規定する諸要因の考察Ⅱ —教師の多忙感

- としてのストレスの問題を中心に一, 岡山大学教育学部研究集録. 135 (1), 2007, 137-146.
- 6) Antonovsky, A., *Unraveling the mystery of health: How people manage stress and stay well*. Jossey-Bass Publishers, San Francisco, 1987. (アントノフスキー, A. 山崎 喜比古・吉井 清子(監訳), 健康の謎を解く—ストレス対処と健康保持のメカニズム—, 有信堂, 2001.)
- 7) 坂本 裕・三尾 寛次・日比 光治・石原 隆・伊藤 智子・太田 千香子・小島 伊織・高橋 清仁・高橋 美穂・土肥 義史・古田 康子・町野 千恵子・宮田 望・安田 晋一郎, 教員の職務の必要性についての教員による捉えに関する調査研究, 教師教育研究, 10, 2014, 169-173.
- 8) 戸ヶ里 泰典, 大規模多目的一般住民調査向け東大健康社会学版 SOC3 項目スケール (University of Tokyo Health Sociology version of the SOC3 scale: SOC3-UTHS) の開発, 東京大学社会科学研究所 パネル調査プロジェクト ディスカッションペーパーシリーズ, 4, 2008.
- 9) Lundberg, O., & Nystrom, P. M., A simplified way of measuring sense of coherence. Experiences from a population survey in Sweden, *European Journal of Public Health*, 5, 1995, 56-59.
- 10) Guttman, L., Recent structural laws of human behavior, *The Bulletin of the Institute of Communication*, 14, 1980, 1-12.
- 11) 川上 憲人, 労働者のメンタルヘルス不調の第一次予防の浸透手法に関する調査研究, 平成 23 年度厚生労働省厚生労働科学研究費補助金労働安全衛生総合研究事業総括・分担研究報告書, 2012.
- 12) 磯和 壮太郎・今井田 貴裕, 学校教員の職務多忙感・負担感尺度作成の試み その1——尺度の基礎統計量と確認的因子分析による検討——, 名古屋芸術大学研究紀要, 44, 2023, 印刷中.
- 13) 磯和 壮太郎・今井田 貴裕, 学校教員の職務多忙感・負担感尺度作成の試み その2——基準関連妥当性と項目への反応の一貫性及び基礎統計量の学校種による比較——, 名古屋芸術大学キャリアセンター紀要, (12), 2023, 印刷中.
- 14) 戸ヶ里 泰典・山崎 喜比古, SOC スケールとその概要—SOC スケールの種類と内容・使用上の注意点・課題, 看護研究, 42, 2009, 505-516.
- 15) 今井田 貴裕・磯和 壮太郎, 学校教員の対人関係満足度と Sense of coherence, バーンアウト症状の関連——学校の対人関係満足度尺度の試作——. 名古屋芸術大学キャリアセンター紀要, 11, 2022, 15-22.
- 16) 藤里 紘子, Sense of Coherence の 3 要素はあらゆる状況で適応的に働くのか, Sense of Coherence への介入研究に向けて. 応用心理学研究, 41, 2015, 147-155.

- 17) 磯和 壮太郎・三宮 真智子, Sense of Coherence は仮想的有能感を含有するのか, パーソナリティ研究, 27 (2) , 2018, 152-154.
- 18) Vogt, K., Jenny, G. J., & Bauer, G. F., Comprehensibility, manageability and meaningfulness at work: Construct validity of a scale measuring work-related sense of coherence, SA Journal of Industrial Psychology, 39 (1) , 2013, 1-8.
- 19) Lustig, D. C., & Strauser, D. R., The relationship between sense of coherence and career thoughts, *The Career Development Quarterly*, 51 (1) , 2002, 2-11.
- 20) Moksnes, U. K., & Haugan, G., Stressor experience negatively affects life satisfaction in adolescents: the positive role of sense of coherence. *Quality of Life Research*, 24, 2015, 2473-2481.

Appendix 1 簡易版学校教員の職務多忙感・負担感尺度

問題文

以下の質問について、あてはまるとおもう選択肢を選んでください。

回答の方法

1. まったくあてはまらない
2. あてはまらない
3. あまりあてはまらない
4. どちらともいえない
5. ややあてはまる
6. あてはまる
7. 非常によくあてはまる

1. 授業や教材研究について、多忙を感じている
2. 校務分掌や事務作業について、多忙を感じている
3. 児童生徒への対応について、多忙を感じている
4. 保護者への対応について、多忙を感じている
5. 授業や教材研究について、負担を感じている
6. 校務分掌や事務作業について、負担を感じている
7. 児童生徒への対応について、負担を感じている
8. 保護者への対応について、負担を感じている

尺度得点を多忙感・負担感として算出する

注) 1 + 2 + 3 + 4 を多忙感, 5 + 6 + 7 + 8 を負担感として用いることも可能

Appendix 2 TP-SOC 9

問題文

あなたの人生に対する感じ方についてうかがいます。次の項目のそれぞれについて、あなたの感じ方をもっともよくあらわしている数字を選んでください。

回答の方法

1. あてはまらない～5. あてはまる

1. これまでの私は、日常生じる困難や問題を理解できたり予測したりできた
2. 私は、日常生じる困難や問題を理解したり予測したりできると思う
3. これからの私は、日常生じる困難や問題を理解できたり予測したりできると思う
4. これまでの私は、日常生じる困難や問題の解決策を見つけることができた
5. 現在の私は、日常生じる困難や問題の解決策を見つけることができると思う
6. これからの私は、日常生じる困難や問題の解決策を見つけることができると思う
7. これまでの私は、人生で生じる困難や問題のいくつかは、向き合い、取り組む価値があると思って来た
8. 現在の私は、人生で生じる困難や問題のいくつかは、向き合い、取り組む価値があると思う
9. これからの私は、人生で生じる困難や問題のいくつかは、向き合い、取り組む価値があると思えると思う

1 + 2 + 3 把握可能感

4 + 5 + 6 処理可能感

7 + 8 + 9 有意味感

注) 回答の選択肢の2～4は空白